

二葉亭四迷全集

第五卷

昭和四十年一月二十六日 第一刷発行 ㊦

評論・感想その他

定価四〇〇円

著者 二葉亭四迷

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎

印刷者 東京都板橋区板橋四丁目四七番七号 白井知一

発行所 東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地 株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

評論

小説總論	八
カートコフ氏美術俗解	二三
學術と美術との差別（バアウロフ）	二二
文學の本色及び平民と文學との關係（ドブロリウボフ）	二六
國民之友夏期大附録「略評」	四二
偏見心理論（ジー、テー、ダブリュー、パトリック）	四三
「アリストーテリ」悲壯體院劇論解釋	五五
小説文體意見	六六
露西亞の婦人界	六六
ひとりごと	七七

昨今のウキツテ	八三
其後のウキツテ	九〇
某政治家の「かくや姫」評	一〇〇
老の繰言	一〇七
そゞろ言	一一一
新聞紙の懸賞小説の鑑査に就て	一二二
ダンチェンコ翁と語る	一二六
入露記	一二八
露都雜記	一三六
雜談	一三〇
美術の本義（ベーリンスキー）	一三六
米氏文辭の類別（ベーリンスキー）	一五五

感想

作家苦心談	一六二
予の愛讀書	一六七
余が言文一致の由來	一七〇
余が翻譯の標準	一七三
露西亞文學談	一七八
エスペラントの話	一八三
エスペラント講義	一八八
世界語エスペラントの研究法	一九五
未亡人と人道問題	一九九
二葉亭主人を訪ふ	二〇二
露國文學談片	二〇四
巨匠談片	二〇八
寫生文に就いての工夫	二〇八
『少年行』に就て	二一〇

小説家の好む小説	二二五
露國の象徵派	二二六
ゴリキイとアンドレーエフの近業	二三〇
文談五則	二三四
私は懷疑派だ	二三〇
露國現代文士の癖	二三六
文壇を警醒す	二三八
『平凡』物語	二四四
露西亞文壇の傾向	二四九
酒餘茶間	二五三
暗中摸索の片影	二五七
文藝坐談	二六一
眼前口頭	二六二
予が半生の懺悔	二六五

送別會席上の答辭	二七五
小説の題のつけ方	二七七
法帖を習ひ連句を読む	二八一
露國文學の日本文學に及ぼしたる影響	二八三
余の思想史	二八五

ロシア事情

摩天嶺逆襲（敵方戰報）	二九四
岫巖の役（六月八日敵方從軍記）	二九六
哈爾賓通信 九月一日オスウオボジヂエーニエ所載	三〇一
歐露鐵道輸送力の大減殺	三〇五
滿洲實業案内	三〇七
必々親展（クロパトキンの評判）	三三三
結局如何 四月十五日オスウオボジヂエーニエ所載の投書	三三九

樺太の森林	三三七
樺太の炭礦	三六三
露國革命黨	三六六
亞細亞ニ於ケル英露ノ關係ヲ論ス	三七三
露國ノ造船業ヲ論ス(闕文)(イー、レオンチ ャフ)	三七七
佚 題(闕文)	三八一
露都より朝日新聞への電報控(一)	四〇〇
露都より朝日新聞への電報控(二)	四〇三
官報局時代の仕事	四二七
官報局と二葉亭 編集部	四六一
評論の翻譯について 編集部	四六三
解 説	四六九

評論

小説總論

人物の善惡を定めんには、我に極美（アイデア）なかるべからず。小説の是非を評せんには、我に定義なかる可らず。されば今書生氣質の批評をせんにも、豫め主人の小説本義を御風聴して置かねばならず。本義などといふ者は到底面白きものならねば、讀むお方にも退屈なれば、書く主人にも迷惑千萬、結句ない方がましかも知らねど、是も事の順序なれば、全く省く譯にもゆかず。因て成るべく端折つて記せば、暫時の御辛抱を願ふになん。

凡そ形（フォーム）あれば茲に意（アイデア）あり。意は形に依つて見はれ、形は意に依つて存す。物の生存の上よりいはば、意あつての形、形あつての意なれば、孰を重とし、孰を軽ともしがたからん。されど其

持前の上よりいはば、意こそ大切なれ。意は内に在ればこそ外に形はれもするなれば、形なくとも尙在りなん。されど形は意なくして片時も存すべきものにあらす。意は己の爲に存するものゆゑ、嚴敷いはば形の意にはあらで、意の形をいふべきなり。夫の米リンスキ（魯國の批評家）が、世間唯一意匠ありて存すといはれしも、強ちに出版題にもあるまじと思はる。

形とは物なり。物動いて事を生ず。されば事も亦形なり。意物に見はれし者、之を物の持前といふ。物質の和合也。其事に見はれしもの、之を事の持前といふ。事の持前は猶物の持前の如く是亦形を成す所以のものなり。火の形に熱の意あれば、水の形にも冷の意あり。されば火を見ては熱を思ひ、水を見ては冷を思ひ、梅が枝に轉る鶯の聲を聞ときは長閑になり、秋の葉末に集く蟲の音を聞ときは哀を催す。若し此の如く我が感ずる所を以て之を物に負はすれば、豈に天下に意なきの事物あらんや。

斯くいへばとて、強ちに實際にある某の事、某の物

の中に、某の意全く見はれたりと思ふべからず。某の事物には各々其特有の形狀備りあれば、某の意も之が爲に隱蔽せらるゝ所ありて、明白に見はれがたし。之を譬ふるに、張三も人なり、李四も亦人なり。人に二なければ、差別あるべき筈なし。然るに此二人のものを見て、我が感ずる所に差別あるは何ぞや。人の意盡く張三に見はれたりといはんか、夫の李四を如何。若し李四に見はれたりといはんか、夫の張三を如何。して見れば、張三も李四も人は人に相違なけれど、是れ人の一種にして、眞の人にあらず。されば未だ全く人の意を見はすに足らず。蓋し人の意は我腦中の人に於て見はるゝものなれど、實際箇々の人に於て全く見はるゝものにあらず。其故如何と尋るに、實際箇々の人に於ては各々自然に備はる特有の形ありて、夫の人の意も之が爲に妨げられ、遂に全く見はれ難きによるなり。故曰、形は偶然のものにして變更常ならず、意は自然のものにして萬古易らず。易らざる者は以て當にすべし、常ならざる者豈に當にならんや。

偶然の中に於て自然を穿鑿し、種々の中に於て一致を穿鑿するは、性質の需要とて、人間にはなくて叶はぬものなり。穿鑿といへど、爲方に兩様あり。一は智識を以て理會する學問上の穿鑿、一は感情を以て感得する美術上の穿鑿、是なり。

智識は素と感情の變形、俗に所謂智識、感情とは、古參の感情、新參の感情といへることなりなんぞと論じ出しては面倒臭く、結句迷惑の種を蒔くやうなもの。そこで使ひなれた智識、感情といへる語を用ひていはんには、大凡世の中萬端の事智識ばかりでもゆかねば、又感情ばかりでも埒明かず。二二ンが四といへることは智識でこそ合點すべけれど、能く人の言ふことながら、清元は意氣で常盤津は身があるといへることとは、感情ならでは解らぬことなり。智識の眼より見るときは、清元にもあれ、常盤津にもあれ、凡そ唱歌といへるものは皆人間の聲に調子を付けしものにて、其調子に身の有るものは常盤津となり、意氣なものは清元となると、先づ斯様に云はねばならぬ筈。されど

若しその身のある調子とか、意氣な調子とかいふものは、如何なもので御座る、拙者未だ之を食うたことは御座らぬと、馴輕者あつて問を起したらんには、よしや富婁那の辯ありて一年三百六十日饒舌に饒舌りして、此返答は爲切れまじ。さる無駄口に暇潰さんより、手取疾く清元と常盤津とを語り較べて聞かすが可し。其人聲にあらざるよりは手を拍つてナルといはんは必定。是れ畢竟するに、清元、常盤津直接に聞手の感情の下に働き、其人の感動（インスピレーション）を喚起し、斯くて人の扶助を待たずして自ら能く説明すればなり。之を某學士の言葉を假りていはば、是れ物の意、保合の中に見はれしものといふべき乎。

然るに意氣と身といへる意は、天下の意にして、一二唱歌の私有にあらず。但唱歌は天下の意を採つて之に聲の形を付し、以て一個の現象とならしめしまでなり。されば意の未だ唱歌に見はれぬ前には、宇宙間の森羅萬象の中にあるには相違なけれど、或は偶然の形に妨げられ、或は他の意と混淆しありて、容易には解

るものにあらず。斯程解らぬ無形の意を、只一の感動（インスピレーション）に由つて感得し、之に唱歌といへる形を付して、尋常の人にも容易に感得し得らるゝやうになせしは、是れ美術の功なり。故曰、美術は感情を以て意を穿鑿するものなり。

小説に勸懲、模寫の二あれど云々の故に、模寫こそ小説の眞面目なれ、さるを今の作者の無智文盲とて、古人の出放題に誤られ、痔疾の療治をするやうに矢鱈無性に勸懲々々といふは何事ぞと、近頃二三の學者先生切齒をしてもどかしがられたるは、御尤千萬とおぼゆ。主人の美術定義を擴充して之を小説に及ぼせばとて、同じ事なり。抑、小説は浮世に形はれし種々雑多の現象（形）の中にて其自然の情態（意）を直接に感得するものなれば、其感得を人に傳へんにも直接ならでは叶はず。直接ならんには、模寫ならでは叶はず。されば模寫は小説の眞面目なること明白なり。夫の勸懲小説とは如何なるものぞ。主實主義（リアリズム）を卑んじて、二神教（デュアリズム）を奉じ、善

は惡に勝つものとの當推量を定規として、世の現象を説んとす。是れ教法の提灯持のみ。小説めいた説教のみ。豈に呼で眞の小説となすにたらんや。さはいへ、摸寫々々とはかりにて、如何なるものと論定めておかざれば、此方にも胡亂の所あるといふもの。よつて試に其大略を陳んに、摸寫といへることは實相を假りて虛相を寫し出すといふことなり。前にも述し如く、實相界にある諸現象には自然の意なきにあらねど、夫の偶然の形に蔽はれて判然とは解らぬものなり。小説に摸寫せし現象も、勿論偶然のものに相違なけれど、言葉の言廻し、脚色の模様によりて、此偶然の形の中に明白に自然の意を寫し出さんこと、是れ摸寫小説の目的とする所なり。夫れ文章は活いんことを要す。文章活ざれば意ありと雖も明白なり難く、脚色は意に適切ならんことを要す。適切ならざれば意十分に發達すること能はず。意は實相界の諸現象に在つては自然の法則に隨つて發達するものなれど、小説の現象中には其發達も得て論理に適はぬものなり。譬へば戀情の切なる

ものは能く人を殺すといへることを以て意と爲したる小説あらんに、其の本尊たる男女のもの、共に浮氣の性質にて、末の松山浪越さじとの誓文も悉皆鼻の端の噓言、一時の戲ならんとせんに、末に至つて外に仔細もなければ、只親仁の不承知より手に手を執つて淵川に身を沈むるといふ段に至り、是ではどうやら洒落に命を棄てて見る如く聞えて、話の條理わからぬ類は、是れ所謂意の發達、論理に適はざるものにて、意ありと雖も無に同じ。之を出來損中の出來損とす。

夫れ一口に摸寫と曰ふと雖も、豈容易の事ならんや。羲之の書をデモ書家が眞似しとて、其筆意を取らんは難く、金岡の畫を三文畫師が引寫にしたればとて、其神を傳はんは難し。小説を編むも同じ事也。浮世の形を寫すさへ容易なことではなきものを、況てや其意をや。浮世の形のみを寫して其意を寫さざるものは下手の作なり。寫して意形を全備するものは上手の作なり。意形を全備して活たる如きものは名人の作なり。蓋し意の有無と其發達の功拙とを察し、之を論理

に考へ、之を事實に徴し、以て小説の直段を定むるは、是れ批評家の當に力むべき所なり。

（明治十九年四月十日「中央藝術雜誌」所載）

カートコフ氏美術俗解

譯者曰く、カートコフ氏は露の碩學なり。學博く、材大に、其名夙に文壇に噪がし。始は莫斯科大學の教諭たりしが、後冠を掛て著述を事とす。千八百七十三年頃にはモスコフスキヤ、ヴェードモスチ、ルースキイ、ヴェーストニク、ソヴレメンナヤ、レートピシ等三新聞の社主と成られしと聞く。されど其後の容子は絶て聞及ばず。

往時利益の穿鑿は、何事を爲さんにも仕舞ひ込みておき難きことなりしも、其後、人間性質本來の需要より起りし事は何事によらず獨立することよかんめれとの議論流行せしより、斯る利益のことに拘らひての枕談議は世の物笑ひとなりぬ。されど利益の穿鑿といへることには、モソツト深き意味籠りあらん。強ちに笑

うて仕舞ふべからず。凡此世に有と所有ものは皆な相互に續合ひ、彼は是へと差響けばこそ互に利にもなり、又害にもなるといふもの也。さて退て考ふるに、險の見ゆるやうに差響かんとには、先づこなたより十分に固まりて餘力を貯へておかねばならず。物にはそれ〴〵本分あり。内其生存の法則に適ふ度に隨ひ、外に及ぼす影響にも自ら強弱の差別を生ずべし。人間の境界に於ても同じことと言はねばならぬ。人の作業は兎角にそれ〴〵の根本境界をもちたがり、獨立の發達をほしがりて、先づ自ら發達せねば他一切の事に差響くことのならぬものなり。今人饑を凌ぎ渴を療さんとおもへば、よく〴〵熟したる果物をしてやるべし。腐れたるか乃至熟さぬものは棄をなすらん。學問より利益をせしめんとならば、之に十分手廣き境界を與へ、人智の力これにのみ懸り居らるゝやうにさすべし。さある時は學問も一大活機のものとなりて、其本來の目的も他のさま〴〵なる第二段の目的の成就によりて成就し、斯る第二段の目的も亦それ〴〵の傾向（ルツシ

ング）の題目となりて、斯くて己が別境界を開くことを得ん。彼は何の故にありや是は何の爲になるやと問はぬもの、それやこれの役に立たぬことをいはぬもの、只各小部分の挨拶は全體が濟し、其全體は各小部分の思ふ儘に斷然と發達せし上ならでは出來ぬものといふことを知らば、それでよし。

美術家の利益あらんことを思はば、美術家を通してやるべし。かのともがら熱氣となりて、ヤレ穿鑿の、ソレ下拵のと、美術を以て唯一の目的とすることの民心を奪はれてゐればとて、必ず〴〵心配には及ばぬことなり。仕事成就して世に出るに及んでは、人間の認識（レグニション）並に生活の上に剩す所なく影響を及ぼさんは勿論のこと。その天性の定に適へば適ふほど其影響も亦隨て強大ならん。謂ふこと勿れ、かゝる美事なる墨跡、斯る形體、音聲に如何なる利益ありやと。謂ふことなかれ、斯ることが人間にはどれ程の利益になるやと。されど今試に是等の詰問に答へんに、素より詩人の如く愛想なくいうて退くべき

にもあらず、又美術の中に籠れる目的の難有こと即ち夫の神意（アイデヤ）世態を乗地になつての觀察は其儘でもハヤ千金の値ありなんどいへることを並べ立つべくもあらねば、是等の用捨なき利益姪亂にはモソツト平たく角立たぬやうに答ふべし。其辭に曰く、實にも人の此世に生れ出でたるは只安閑として沈思默考する爲のみにあらず。人たるものは世の中の一大戰爭に加はりて、銘々己が勢力資産相應に働かねばならぬ筈ゆゑ、人間界に有と所有ものは皆悉く勇み進で縦横に働き、皆悉く力を竭して叩き合ふ。さらばかほどに戰爭に入用なる力にてありながら、近寄ることもならぬ圍の中に閉籠り、僥倖として沈思默坐し、露ほどもはたのものの手助とならぬを見ては、堪忍袋の緒の切るゝも至極尤なることとはいへども、慥に此等の力は無益なるものにして止まんや。實に此等の高尚なる境界より取て返して人生に及ぼす影響は出でまじきや。眞に互に差響かずして、人間の認識及び生活に影響せぬほどさほどに隔離^{かくはな}れたる境界ありや。イヤ物類相互

の關係は一寸表面を相たぐらるゐなさやうな粗勿の鑑定では解らぬものなり。働といへるものは、遠く其原因を去て、限もなくさま／＼の容體に變じ、さま／＼の色に染まるゆゑ、懸離れたる働を其最初の原因と較ぶるときは秋毫も似寄りたる所なしと見ゆること間々ある習なり。されば美術を専門として作り出せるものとても、人生に影響せず居るものならず。又其影響は全く思ひもよらぬ所に現はるゝものなり。うつくしと思へる感情は文心中に於て其儘立消すと思ふ人ありや。其感情は、他の如何なるものにも變ぜず、如何なるものにも現はれずと思ふ人ありや。人はいさしらず、斯く申す記者は、眞の開化といへるものは此原素なうては出来ぬものと思ふものから、歴史はさま／＼の例を以て我説の謬なきを保すと見えたり。夫の人民の始て歴史的生涯に進みしことの世に明らかにたりたるは、文辭の手柄なり。其發達に伴ひて之が勢力と性質との最上の標示物となりたるものは、豈美術と智識との二にあらずや。蓋し是等の事業は、浮世のヤツサ